

キリストを生きる

水谷 憲

奨励者紹介〔みずたに・けん〕

日本キリスト教団久宝教会牧師

兄弟たち、わたしの身に起こったことが、かえって福音の前進に役立ったと知ってほしい。つまり、わたしが監禁されているのはキリストのためであると、兵営全体、その他のすべての人々に知れ渡り、主に結ばれた兄弟たちの中で多くの者が、わたしの捕らわれているのを見て確信を得、恐れることなくますます勇敢に、御言葉を語るようになったのです。

キリストを宣べ伝えるのに、ねたみと争いの念にかられてする者もいれば、善意でする者もいます。一方は、わたしが福音を弁明するために捕らわれているのを知って、愛の動機からそうするのですが、他方は、自分の利益を求めて、獄中のわたしをいっそう苦しめようという不純な動機からキリストを告げ知らせているのです。だが、それがなんであろう。口実であれ、真実であれ、とにかく、キリストが告げ知らされているのですから、わたしはそれを喜んでいきます。これからも喜びます。というのは、あなたがたの祈りと、イエス・キリストの霊の助けとによって、このことがわたしの救いになると知っているからです。そして、どんなことにも恥をかかず、これまでのように今も、生きるにも死ぬにも、わたしの身によってキリストが公然とあがめられるようにと切に願ひ、希望しています。わたしにとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです。けれども、肉において生き続ければ、実り多い働きができ、どちらを選ぶべきか、わたしには分かりません。この二つのことの間で、板挟みの状態です。一方では、この世を去って、キリストと共にいたいと熱望しており、この方がはるかに望ましい。だが他方では、肉にとどまる方が、あなたがたのためにもっと必要です。こう確信していますから、あなたがたの信仰を深めて喜びをもたらすように、いつもあなたがた一同と共にいることになるでしょう。そうなれば、わたしが再びあなたがたのもとに姿を見せるとき、キリスト・イエスに結ばれているというあなたがたの誇りは、わたしゆえに増し加わることになります。

ひたすらキリストの福音にふさわしい生活を送りなさい。そうすれば、そちらに行きあなたがたに会うにしても、離れているにしても、わたしは次のことを聞けるでしょう。あなたがたは一つの霊によってしっかり立ち、心を合わせて福音の信仰のために共に戦っており、どんなことがあっても、反対者たちに脅されてたじろぐことはないのだと。このことは、反対者たちに、彼ら自身の滅びとあなたがたの救いを示すものです。これは神によることです。つまり、あなたがたには、キリストを信じるだけでなく、キリストのために苦しむことも、恵みとして与えられているのです。あなたがたは、わたしの戦いをかつて見、今またそれについて聞いています。その同じ戦いをあなたがたは戦っているのです。

(フィリピの信徒への手紙 1章12—30節)

アダムとエバの末裔

神のつくられた初めの人間はアダムとエバだとされていますが、その彼らがエデンの園で神から食べる

ことを禁じられていた木の実を、蛇にそそのかされた挙句に食べてしまい、エデンの園を追い出されてしまったという出来事が創世記に伝えられています。そして私たち人間が、太古の昔よりさまざまな罪の虜となり続けているのは、私たちがエデンの園を追われたアダムとエバの末裔であるからだ、というわけです。ローマ・カトリックでは、道徳的な観点から見て特に重大な結果をもたらす七つの罪あるいは過失、すなわち「傲慢・貪欲・情欲・嫉妬・貪食・憤怒・怠惰」を「七つの悪徳」として定めているわけですが、現在の私たちの社会においても、毎日、新聞を開いてもテレビをつけても、その七つの悪徳に基づくような犯罪が行われた知らせのない日はない。もはや今では、親が子を殺し、子が親を殺すような事件を見ても「またか」と感じてしまう始末で、他人を殺害する事件などは当たり前すぎて、よほど衝撃的な事件でもない限り何事もなく読み飛ばし、あるいは聞き流してしまうような日常であるように思います。しかしそのようなアダムとエバの末裔でありながらも、誰かの命を生かすためにその身を犠牲にする人が、昔も今もわずかながらもいたわけです。

例えば、第二次世界大戦中のアウシュヴィッツ強制収容所という、ユダヤ人をはじめとするいわゆるナチスが言うところの「下等民族」の絶滅収容所において、死刑を言い渡されたある一人のポーランド人の命を救うために、自らの命を身代わりに差し出したコルベ神父がそうでした。また、20世紀中盤のアメリカにおいて、アフリカ系アメリカ人、いわゆる黒人の当たり前の尊厳の回復と権利の獲得とを夢見て、迫害や死の恐怖にさらされながらも民衆の先頭に立ち続け、その末に暗殺されたキング牧師がそうでした。

私たちにとってもっとも日常の身近な場面においてさえも、おぼれる妹を助けようとして川に飛び込んで命を落とした幼い姉があり、生徒の命を守るために学校に侵入した暴漢と戦って殉職した教師があり、駅のホームから転落した男性を助けようと自らホーム下へとつさに飛び降りたために、命を落とした青年がありました。東日本大震災において、逃げる人々を誘導していて波にさらわれていった消防団員や、津波に飲まれる最後の瞬間まで防災無線で避難を呼びかけていた職員の方がいました。猛吹雪の中で遭難し、娘に自分の上着をかけて子守唄を歌いながら死んでいった父親がありました。自分の身を犠牲にしようとはまでは考えていなかったにせよ、誰かの命のために自分のことを忘れてとつさに身を投げ出した人々が、アダムとエバの末裔の中にも確かにいたのです。

キリストの生き様・死に様

しかし、さすがにそのような出来事を私たちは普段それほど頻繁に耳にすることはありません。だからこそ、いざそんな出来事を知った時私たちは、その人々の生き様・死に様に強く心を揺さ振られるのですが、それでも私たちにとって直接関係のないことであると、いつしかその崇高な行為も記憶から薄れていってしまうものです。しかし、もしもそれが、たまたま自分のすぐ身近で起こったことであれば、どうでしょうか。誰かのために自分の身を犠牲にするという崇高な行為をなした人物が、自分の親、兄弟、子ども、あるいは友人、幼なじみ、職場の同僚、学校の先生、いつも親しく挨拶をしていた近所のおばちゃんだったらどうでしょうか。その生き様・死に様は、新聞の三面記事どころか、きっと世間が忘れ去ったとしても自分の心だけでは深く、いつまでも残っていくのではないのでしょうか。

「確かにあなたの行為は崇高なものだった。誰にも恥じることはない。でも、それと引き換えにあなたは

自分の人生を棒に振ってしまったのではないか。ばかだなあ。しかしこのことによって、あなたの人生・あなたの命には大きな意味があったのだということが私にはよく分かった。できることならこの私もあなたのように生き、あなたのように死ねたら・・・」私だったらそう感じるような気がするのです。そして同時に、イエス・キリストの生き様・死に様に、クリスチャンである私はどれほど影響を受けているのだろうか、とも考えさせられるのです。

イエスが十字架につけられて死んだのは、私たち人間を罪の滅びから救い上げるためだった、と言われていいます。それはつまり、この私、七つの罪に代表される小さな罪をいつも積み重ねながら生きているこのしょもない私の代わりに、イエスが自分の命を投げ出して神に対して罪滅ぼしをしてくださった、ということです。何の関係もないこの私の命を、罪による破滅、いわゆる地獄行きから助けるために、イエス・キリストは命を投げ出して犠牲になって下さった、ということです。だからと言ってキリストは、それを恩着せがましく私たちにアピールしたりはされない。しかし私たちはその、私たちの全く気付かないところで実は私たちのために命を投げ出して下さっていたというキリストの生き様や死に様を、もう少し知っていてもいいのかもしれない。

聖書の御言葉は、私たちに「お前は赤ん坊の頃に高熱を出して死にそうになったことがあってなあ、その時お前のお母さんは夜も寝ないで看病してくれていたんだよ」とか「お前のお父さんがいないのはなあ、お前が小さい頃に車にはねられそうになって、その時に身を投げ出して助けてくれたからなんだよ」などという、私たちがある日突然気付かされる、今まで知らなかった真実を知らせてくれる手紙、あるいは語りのようなものと私は理解しています。しかし、真実であっても読まれなければ知られないままに終わってしまいますから、初めは新聞の社会欄を眺めるようなつもりでいい。「へー、こんな出来事あったんだ」で十分。イエスの十字架の事件を読んで「ふーん、ひどい話だ、でもこの人えらいなあ」とか「こんなええ人が、気の毒なことやなあ」とか思うくらいで結構。でもその「三面記事」がいつか「キリストがこうやって惨めに死んでいったのはなあ、実はアンタのためだったんだよ。キリストはアンタの命を助けるために、アンタを死なせないために、あえて十字架についたんだよ。でもキリストは文句一つ言わなかったのさ。アンタのためだったからだよ」というメッセージとなってみなさんに語りかけてくる時がくることを、私は信じています。

キリストを生きる

パウロは「わたしにとって、生きるとはキリストであり、死ぬことは利益なのです」と言っています。「生きるとはキリストである」とはどういうことか。意味がよく分かりませんね。今日の箇所の小見出しを見ると「わたしにとって、生きるとはキリストを生きること」と書かれてあります。では「キリストを生きる」とはどういうことか。これでもまだ意味がよく分かりませんね。これは「キリストのように生きる」ということである、と一つは理解できますが、もう一つそれに加えて「キリストと共に生きる」ということでもある、と私は理解しています。私たちと親しかった人・愛する人・自分によい影響を残した人が、いつまでも自分の心のうちに生きていて、いつまでも自分と共にあるように、キリストと共に生きるということです。いつでもキリストと共にあって、こんな時キリストならどうされたか、キリストならどう言われたか、キリストはどう思われるか、と常にキリストと一緒に人生を歩んでいくということです。

もちろんその過程においては、キリストと共にあるが故にしんどい思いをすることもあろうでしょう。キリストは愛と優しさを貫いたために苦しめられ痛めつけられ、十字架につけられた人でしたから、私たちが本当にキリストと共に生きようとする時、同じような思いをする時もあるかもしれません。しかしそれも、隠れたところで命を投げ出してまでも、この私を永遠の滅びから救い上げてくださったキリストへの恩返しであることを思って、乗り越えていけたらと思います。そしてその「キリストを生きる」私の姿から、同様の「キリストを生きる」者の連鎖が生まれ広がっていくその時、キリストの犠牲も、誰かの命のために身を投げ出したあらゆる人々の命も、本当に報われるのだと信じます。

窮屈で息苦しい世の中になってきていますが、春学期統一テーマである「主の慈しみは決して絶えない。主の憐れみは決して尽きない」との言葉にあるように、神はアダムとエバの末裔であるこんなしょもない私たちをも決して見捨てることなく、私たちを表から裏から支え良い方向へ導き、何らかの形でこの世のために豊かに用い、その労苦に必ず報いて下さるのだということを、私たちは「キリストを生き」ながら共に信じたいと思います。

2016年5月18日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録